The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	極限のモと普遍数量詞の統語構造
Author(s)	榎原, 実香
Citation	間谷論集. 2017, 11, p. 85-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

極限のモと普遍数量詞の統語構造

榎原　実香

1．はじめに

日本語のモは数量詞に付加することで、(1)のように数量の大きさを強調するはたらきをもつ。しかし、日本語母語話者には「全て」「両方」などといった普遍数量詞との共起[i]は容認されない。(2)(4)のようなデータは中国語母語話者の日本語学習者に多く見られ、中国語では数量表現などを強調する「都 dou[ii]」が普遍数量詞への付加を許すために生じるデータであるとも考えられるが、日本語ではなぜ普遍数量詞へのモの付加が許されないのだろうか。

(1)　学生が 100 人<u>も</u>来た。
(2)　＊学生が全員<u>も</u>来た。
(3)　花子はご飯を 10 杯<u>も</u>食べた。
(4)　＊花子は魚と肉を両方<u>も</u>食べた。

本稿ではこれらのデータを出発点とし、まず、極限のモと普遍数量詞が統語的な観点からそれぞれとりたて詞モ、存在数量詞とは異なる性質のものであることをおさえた上で、極限のモと各数量詞の生起位置、共起に関するデータを分析し、極限のモと数量詞の統語的な関係を考察する。

2．極限のモ

2．1　極限のモの意味的特徴

モの意味機能として典型的な「累加」は「文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加える（日本語記述文法研究会編 2009、p.19)」はたら

きをもつ。一方、「極限」は、「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示す（日本語記述文法研究会編 2009、p.87）」機能をもち、累加のモであれば想定される「同類のほかのもの」を含意しない要素である。本稿で扱う極限のモは、その中でも寺村(1991) に見られるような数量詞につき数量の大きさを強調するモに限定し、とりたて詞モの基本的な機能とは一旦切り離して考察を進めたい。

2.2 極限のモの統語的特徴

とりたて詞モの分布は基本的に自由であることが多く指摘されているが、極限のモの分布の特徴として、(6)(7)のように累加のモでは現れにくい属格の「ノ」の直前に生起できるという点があげられる。また、統語的な制約として、数量の大きさに言及したい場合は、(8)-(10)のように必ず数量詞に直接付加させなければならないことがわかる。(9)(10)の「30人」に付加しているモは極限のモとして30人が多いことを示すが、(8)(10)の「学生」に付加しているモは「学生以外」が含意されるため累加のモとしてはたらいており、このモによって「30人」を強調させることはできない。累加のモと極限のモは生起できる位置、意味機能が異なるため、(10)のように一文中にモが複数現れることが許されるのである。

(5) 田中先生の学生が待っている。
(6) * 田中先生もの学生が待っている。
(7) 30人もの学生が待っている。
(8) 先生が来た。30人の学生も来た。
(9) 先生が来た。そして30人もの学生が来た。
(10) 先生が来た。30人もの学生も来た。

2.3 量化表現としてのモ

青柳(2006) 等ではモも一種の量化詞であると述べられているが、極限のモも付加した数量の程度を強調するという点において量化表現と密接な関わりがあり、よって本稿では極限のモが数量詞等の量化表現と同様の性質をもつというこ

とを仮定する。また、青柳(2006) 等ではモのようなとりたて詞はさまざまな品詞に付加するものであるとされているが、本稿では極限のモも累加のモの延長線上にあるものとし、数量詞の付加位置に生起すると考えたい。

3．普遍数量詞

3．1　普遍数量詞の統語的特徴

数量詞に関する研究は従来数多くなされており、英語では、統語的な観点から存在数量詞（以下、Existential Quantifier; EQ）と普遍数量詞（以下、Universal Quantifier; UQ）に大別されるが、その中でいわゆる数量詞遊離が普遍数量詞にしか許されないことが指摘されている。日本語の数量詞にも英語ほどではないが、以下のようにUQは分布がEQと比べ自由であるという指摘が見られる。

(11)　＊この団地では、B棟の住人が8人高校の先生だ。（大木 1987、p.56）
(12)　この団地では、B棟の住人がすべて高校の先生だ。（大木 1987、p.57）

また、奥津(1986) 等は「数量詞」を「数詞＋助数詞」と規定しているが、UQにおいては、「全」「両」などは「全人類」「両言語」など名詞に前置し接頭辞的なはたらきをすることはあるものの、例えば「全」と「員」や「両」と「方」はそれぞれ自立的でないことから、一般的な数量詞とは異なり、UQ自体が最小単位となる[iii]。よって、EQとUQには統語的な違いが見られるという仮説をたて、考察を進めていきたい。

本稿では、数量詞を意味的な観点から分類した宇都宮(1995) のうち、「全員」「全て」などの「100%」を表す「全数」をUQ、またUQと対照されるEQの中でも比較的分布の自由な「3個」「5人」といった「定数」を数量的数量詞（以下、Numeral Quantifier; NQ）とし、この二種類の数量詞を中心に取り扱う[iv]。

3．2　数量詞の階層構造

モとUQの階層構造を明らかにするにあたり、Ochi(2012) 等による日本語のNQとUQに関するデータをもとに、考察を進める。Ochi(2012) では、数量

詞自体が主要部となる句としてCLPや∀Pが提案され、そこからNPが移動するという分析をとっていたが、本稿では構造を簡略化して表示する。NPと数量詞とが多層的な構造をもつ場合、NPが項としてはたらくことから、数量詞が投射するとは考えにくく、NQはNPに付加する、またはNPを特定する決定詞（determiner）のようなものであると見る。また、以下の例のように日本語のUQがNQを含む名詞句DP^{v}より外側に位置することから、UQはNQとは異なり、(17)の構造のようにDPの付加位置にあると考えられる。

● NQ ×[UQ]

(13) 学生 二人が [両方] 来た。

(14) *学生 [両方]が 二人 来た。

(15) 学生 30人が [全員] 来た。

(16) *学生 [全員]が 30人 来た。

(17) $[_{DP}[_{DP}$ 名詞句NP 数量的数量詞NQ] [普遍数量詞UQ]]

4．数量詞のデータ

4．1 数量表現の5形式

普遍数量詞と極限のモの生起位置、共起関係を分析するに先立ち、数量表現の基本的な事項をおさえておく。まず、数量表現の型として、本稿では、岩田（2013）による「定番4形式」にQNC型を加え、以下の5パターンを分析の対象とする。（Qは数量詞、Nは名詞、Cは格を示す。）

● Qノ NC型

(18) 3人の学生が来た。

● Nノ QC型

(19) 学生の3人が来た。

● NQC型

(20) 学生3人が来た。

● NCQ型

(21)　学生が 3 人来た。

● QNC 型

(22)　3 人学生が来た。

以下より、NQC 型、NCQ 型、QNC 型の数量表現が Q ノ NC 型や N ノ QC 型とは異なること、NCQ 型と QNC 型は NQC 型の数量詞 Q が名詞 N から切り離されたものであることを示す。まず(23)と(24)を比較すると、Q ノ NC 型は、NQ がノを挟み NP の前に置かれることで、前提として NP がどれだけの数量を有しているのかを表し（全体数）、また N ノ QC 型における NQ は NP の割合を示す（部分数）ことがわかる。さらに、(25)-(29)を観察すると、NQC 型(27)、NCQ 型(28)、QNC 型(29)は売れ残った雑誌の数量として容認されるのに対し、Q ノ NC 型(25)は本屋にあった雑誌数を表し、そのどちらとも言えない(26)は使用されにくい型だと考えられる。NQC 型、NCQ 型、QNC 型における名詞と数量詞との意味関係はそれぞれ類似しているため、本来は同じ型だと予想される。

(23)　10 冊の雑誌の 7 冊が売れ残っている。

(24)　*7 冊の雑誌の 10 冊が売れ残っている。

(25)　本屋にある 7 冊の雑誌が売れ残っている。

(26)　? 本屋にある雑誌の 7 冊が売れ残っている。

(27)　本屋にある雑誌 7 冊が売れ残っている。

(28)　本屋にある雑誌が 7 冊売れ残っている。

(29)　7 冊本屋にある雑誌が売れ残っている。

奥津(1986) では、意味関係が同じ三つの形式のうち、NQC 型を基底構造とする立場を示しているが、本稿もそれにならい、残り二つはその基底構造から派生したものであると考えたい。NCQ 型と QNC 型のデータに対し Ochi(2012) 等による副詞挿入テストを援用すると、副詞「やっと」が介入できるものはその前後の語の緊密性が低いと考えられるが、(33)(34)で副詞挿入が可能であることから、少なくともこれらは NP と NQ が統語上分離した型であることがわかる。

(30) *[3人のやっと学生] が来た。

(31) *[学生のやっと3人] が来た。

(32) *[学生やっと3人] が来た。

(33) [学生] がやっと[3人] 来た。

(34) [3人] やっと[学生] が来た。

以上、名詞句と数量詞の構造をデータでもって概観した（表1を参照のこと）が、名詞との意味的な関係から数量表現を以下①、②、③に大別し、その名詞句と数量詞の組み合わせ三種類が異なる構造をもつという見解が妥当であることを見た。また、③のうちNCQ型とQNC型はNQがNPから切り離されている構造であり、基底構造のNQC型（[NP+NQ]）から派生したものであることを確認した。

表1　数量詞Qと名詞Nの組み合わせ

		Qの意味	副詞挿入
①	Qノ NC型	全体数	*
②	Nノ QC型	部分数	*
③	NQC型	数量	*
	NCQ型	数量	OK
	QNC型	数量	OK

ここから、上記の三つの型は図1のとおり、①QノNC型（[$_{DP}$[[NQ] ノ]NP]）、②NノQC型（[$_{DP}$[[NP] ノ]NQ]）、③NQC型（[$_{DP}$[NP] [NQ]]）のようなそれぞれ複合的な名詞句の構造（これらを「複合DP」と呼ぶ）をもつということが予想される。本稿では、この三つの型に極限のモ、普遍数量詞を加えたデータを分析し、生成文法の枠組みで名詞句とその周辺の構造を提案する。

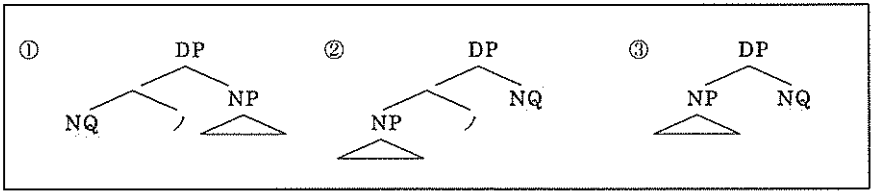

図１

４．２　数量詞残余分析

③のタイプにおいて、NQC 型から、NCQ 型、QNC 型を派生させる場合、すなわち、数量詞を名詞句から切り離す（数量詞遊離）場合、その派生の仕組みとしてさまざまな見解が考えられるが、本稿では、例えば主語となる名詞句が顕在的な主語位置である TP 指定部に移動する途中で数量詞が残留する Sportiche (1988) の数量詞残余 (Quantifier Stranding) 分析を採用する。図２のように、複合名詞句 DP $[_{DP}$[NP][NQ]] が主語位置などに移動する際、その経由した位置に NQ が残ることがあり、その場合 NCQ 型となる。またさらに、数量詞のみをかき混ぜ句として CP 層の指定部に移動させると、QNC 型となることも考えられる。

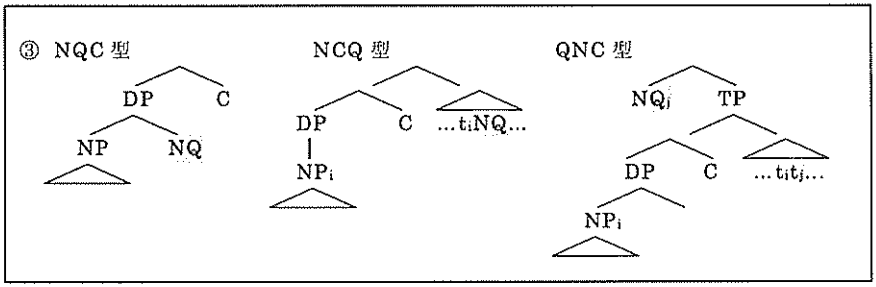

図２

また、Sportiche(1988) の分析を採用した場合、数量詞が、主語となる名詞句が経由するはずのない目的語と動詞の間に生じうるとする三原(1998) や高見(1998) などのデータが問題となるが、前田(2013) 等による vP の階層構造を援用すれば、説明されるだろう。

(35) a. A: この新刊雑誌、売れてますか？

B: ええ、今朝も学生さんがそれを5人買って行きましたよ。

b. 灘高の生徒は、毎年東大を80人以上受験する。（高見 1998、p.100）

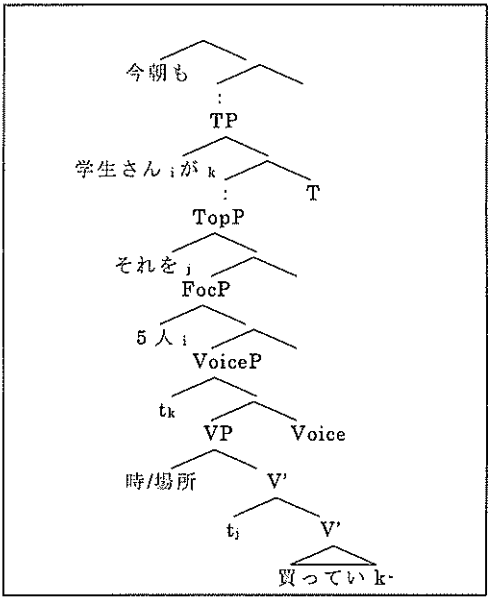

図3

高見(1998) によると、(35)における「5人」「80人」は焦点化される要素である。そのように考えると、「それ」や「東大」などの目的語は焦点化されていない要素、すなわち既知の情報であり、その場合目的語は主題としてさらに上部へ移動する可能性が考えられる。実際に、(35a)の例では、目的語である「それ(新刊雑誌)」はAの発話からも「話題」となっていることがわかる。(35a)のBにおける数量詞残余を樹形図で示すと、図3のようになる。もともとVoiceP (vP) の指定部にあった「学生さん5人」がTP指定部に移動する過程でvP内のFocP指定部を経由して「5人」のみがFocP指定部に残り、結果「学生さん」のみが主語位置に到達するという派生が考えられる。また、目的語も「主題」とし

て TP より下にある TopP 指定部に移動したために、目的語に後続した数量詞が許されたと考えることもできるだろう。

4．3　普遍数量詞のデータ

本節より具体的なデータの分析を進めるが、まず、①〜③の構造ごとに UQ を加えたものを分析する。

① Q ノ NC 型

(36)　*全員[30 人の学生]が来た。

(37)　[[30 人]全員の学生]が来た。

(38)　[30 人の学生]全員が来た。

(39)　[30 人の学生]が全員来た。

まず、①の構造に「全員」を加えたデータでは、UQ が NQ に直接付加したもの(37)、複合 DP ①へ付加したもの(38)、もしくは複合 DP の後方に遊離したもの(39)が容認される。また、(37)においては、「30 人」が「学生」の数量を表すのではなく、「30 人の先生」の「学生」という解釈も考えられるが、その場合、「30 人」は数量詞ではなく、先生の人数を表すことで「先生」の代わりとして用いられ、「先生」が省略されたものであるとも考えられる。また、(36)に関して、「全員」と「30 人」は情報価値が同等であるため、「全員」のみかき混ぜられ焦点が当てられるという構造は経済的であるとは言えない。

② N ノ QC 型

(40)　[[全員学生]の 30 人]が来た。

(41)　*[[学生]全員の 30 人]が来た。

(42)　[学生の[30 人]全員が来た。

(43)　[学生の 30 人]が全員来た。

続いて、②のデータでは、(42)は複合 DP ②への付加と NQ への付加の二通り

が考えられ、複合DPからUQが切り離された(43)も容認されることが確認された。(41)が非文であることから、UQが名詞「学生」へ直接付加するという構造は許されないことがわかる。また(40)は「全員」の後にポーズをおくと容認されにくくなるため、「全員」が複合DP②を修飾しているのではなく、「学生」のみを修飾していることがわかる。「全員」が「学生」を修飾した場合、「30人が全員である」ということではなく「全員が学生である」という解釈が生じ、この場合UQとしてではなく、名詞を修飾するものとして(40)が容認される。

③のNQC型も②と同様に、UQは、NQまたは複合DP③への付加（46）、もしくはUQのみ残余されたもの(47)しか許されない。

③NQC型

(44) *全員[学生30人]が来た。

(45) *[学生全員30人]が来た。[vi]

(46) [学生[30人]全員が来た。

(47) [学生30人]が全員来た。

また(44)に関しては、(36)と同様意味処理が複雑になるため、数量詞が文中に複数ある状態で「全員」のみ談話の機能をもち移動が生じるということは容認されない。

③NCQ/QNC型

(48) *全員[学生]が[30人]来た。

(49) *[学生]全員が[30人]来た。

(50) *学生が全員[30人]来た。

(51) 学生が[30人]全員来た。

(52) *全員[30人]学生が来た。

(53) [30人]全員[学生]が来た。

(54) *[30人][学生]全員が来た。

(55) *[30人][学生]が全員来た。

NQ である「30 人」が NP「学生」から離れて位置している(48)-(55)の NCQ/QNC 型においては、UQ は NQ に付加している状態(51)(53)でなければ容認されないことが明らかとなった。また、NQ のみ遊離している(49)(54)や NQ と UQ がそれぞれに遊離している(48)(50)(52)(55)は容認されないことから、移動する句、残余される句も数量詞同士まとまらなければならないということがわかる。

以上より、UQ は①、②、③どの数量表現に現れても NQ への付加、複合 DP への付加、複合 DP の後方に残余される形しか許されないことが明らかとなった。

5．極限のモと普遍数量詞の統語的考察

5．1　極限のモと普遍数量詞の構造

5．1．1　形式 A

以上、数量表現の 5 形式に UQ を加えたデータを概観したが、本節ではさらに極限のモのデータを加え、UQ とのデータの共通点、相違点を整理する。

まず、極限のモは、①、②、③のどの型であっても数量詞に直接付加するものしか認められないが、UQ も NQ へ直接付加する構造が許されることが明らかとなっている。これらは階層構造上も同じ位置にあると予想し、「形式 A」とする。

(56)　a. [30 人]全員の学生が授業に出席している。
　　b. [30 人]もの学生が授業に出席している。
(57)　a. 学生の[30 人]全員が授業に出席している。
　　b. 学生の[30 人]もが授業に出席している。
(58)　a. 学生[30 人]全員が授業に出席している。
　　b. 学生[30 人]もが授業に出席している。

極限のモと UQ に共通してみられる形式 A の構造として、図 4 を提案する。これは、モや UQ が複合 DP 内の NQ に直接付加したものであると考えられ、① $[_{DP}$[[NQ] モ /UQ] ノ [NP]] 、② $[_{DP}$[NP] ノ [[NQ] モ /UQ]]、③ $[_{DP}$[NP] [[NQ] モ /UQ]] のような構造が予想される。①、②の構造ではノと NP の複合体は構成素を成さないため、構成素の一部である [[NQ] モ /UQ] を残したまま移動させるこ

とはできず、③のみ [[NQ] モ /UQ] の複合体を残余させることができる。

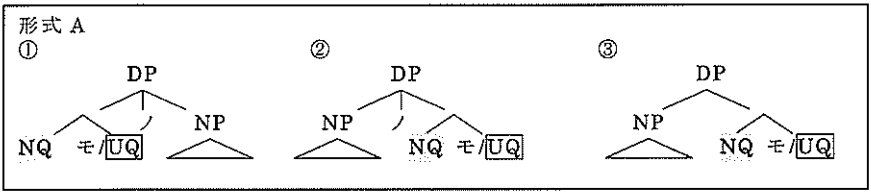

図4

5.1.2 形式B

次に、UQ が許され、極限のモが許されないデータとして、複合 DP ①に付加しているもの(59)、複合 DP から後方に離れているもの(60)-(62)を列挙する。(59b)において、モは「学生」の他に来た人が存在することを含意するのであれば付加可能であるが、「30 人」が多いということを表す文脈では使用されない。これらは UQ のみが生じうる構造をなすとし、「形式 B」とする。

(59) a. [30 人の学生]全員が授業に出席している。
b. #[30 人の学生]もが授業に出席している。
(60) a. [30 人の学生]が全員授業に出席している。
b. *[30 人の学生]がも授業に出席している。
(61) a. [学生の 30 人]が全員授業に出席している。
b. *[学生の 30 人]がも授業に出席している。
(62) a. [学生 30 人]が全員授業に出席している。
b. *[学生 30 人]がも授業に出席している。

形式 B は、UQ が複合 DP と切り離しやすい図5のような構造が考えられる。すなわち、これらの基底構造は ① [[DP[NQ] ノ [NP]] UQ] 、② [[DP[NP] ノ [NQ]] UQ]、③ [[DP[NP] [NQ]] UQ] であり、いずれの数量表現であっても UQ のみの残余が可能となると考えられる。

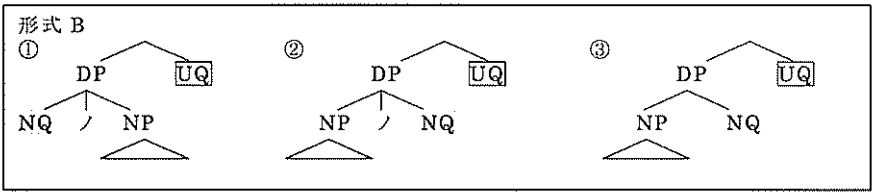

図５

５．２　形式別データ分析

UQ が形式 A をとる場合と形式 B をとる場合、意味的な影響としては UQ が形式 A をとるか形式 B をとるかよりも、数量詞が名詞にかかっているか、遊離し動詞句にかかっているかといった構造の差の方が大きく、実際にはあまり大きな違いは見られない。下記の例で注目されたいのは、文学部の留学生の数である。

形式 A

(63)　文学部の[(??100 人中) 30 人全員]の留学生が試験を受けた（?? が、70 人は受けなかった)。

(64)　文学部の留学生が[(??100 人中) 30 人全員]試験を受けた（?? が、70 人は受けなかった)。

形式 B

(65)　[文学部の（100 人中）30 人の留学生]が全員試験を受けた（が、70 人は受けなかった)。

(66)　[文学部の留学生（100 人中）30 人]が全員試験を受けた（が、70 人は受けなかった)。

UQ が「30 人」という NQ を修飾している形式 A では、文学部の留学生の数は「30 人」で「全員」であることが予想される。一方、形式 B では、文学部に何人在籍しているかは問題ではなく、文学部の中の「30 人」の留学生が試験を受けたという解釈になる。以上から、UQ が NQ へ付加されるか、複合 DP へ付加されるかによって「30 人」の解釈に差が生じることが明らかとなった。

5.3 極限のモと普遍数量詞の共起

最後に、極限のモとUQの同一文中の共起関係を確認する。

(67) *学生が全員も来た。 (=(2))
(68) [30人もの学生]全員が授業に出席している。
(69) [30人もの学生]が全員授業に出席している。
(70) [学生の30人も]が全員授業に出席している。
(71) [学生30人も]が全員授業に出席している。
(72) ?*学生の[30人]も全員が授業に出席している。
(73) ?*学生[30人]も全員が授業に出席している。
(74) *[30人]も全員の学生が授業に出席している。
(75) *学生が[30人]も全員授業に出席している。
(76) *[30人]も全員学生が授業に出席している。

以上はこれまでの観察から容認される可能性のあるデータであるが、その中でも形式AのNQに直接付加する位置にモが生起し、かつ形式Bの複合DPの付加位置にUQが生起していたと考えられる(68)-(71)のような例のみが共起可能であり、NQにモとUQがどちらも付加する(74)-(76)のような例は認められないことが明らかである。(72)や(73)に関しては、UQが形式Aをとっている可能性も形式Bをとっている可能性もあり、形式Bをとっている場合は非文とは言い切れないが、数量表現が連続するため非常に容認されにくい例だろう。

以上より、UQはDPへの付加とNQへの付加の二種類の基底構造が考えられること、形式Aにおいて極限のモがNQに付加するUQと同じ統語位置を占めるということを示した。

5.4 形式別数量詞残余

第5節では、形式Aと形式Bデータを分析し、それぞれの構造を提案してきたが、数量詞が残余した場合、その構造は以下の図6のように示せるだろう。(矢印先の丸で囲った部分が残余の対象となるものである。)

形式Aにおいては、③の型のみNQとモ/UQに同時に数量詞残余が生じるが、NQにモ/UQが付加した句（QP）として経由位置に残り、NP（DP）のみが移動していく。一方、形式Bでは、①、②、③どの型においてもUQのみ切り離すことが許され、UQに付加されていた複合DPが構成素として移動していく。形式Aの場合であれば残余されたQPは量化表現が集合体としてまとまっているためかき混ぜが許されQNC型も容認されるが、形式Bで残余されるのはUQのみであり、NQが離れたDP内にあるため、移動の対象とはならない。

以上より、形式AではNQとUQの複合体QPが残余されQNC型も許されること、形式BではUQのみが残余され、QNC型が許されないことを述べた。

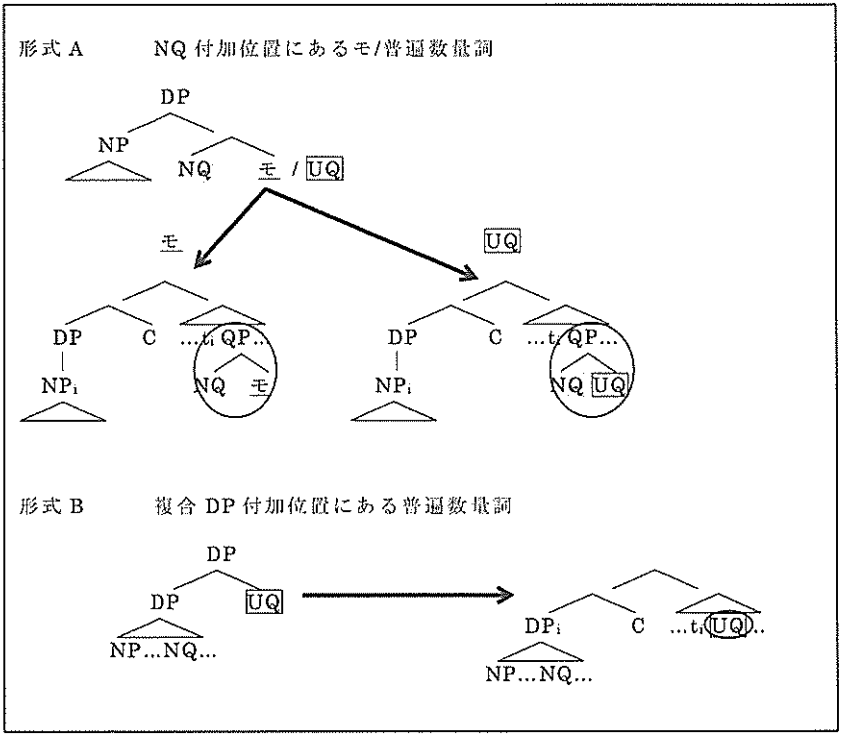

図6

6．おわりに

本稿では、日本語の極限のモと普遍数量詞に関して統語的なアプローチを試みた。データの分析により、普遍数量詞はDPの付加位置とNQの付加位置の二箇所に位置させることが可能であり、極限のモと普遍数量詞が共起できないのはそのうちどちらもがNQに付加する場合であることを示したが、極限のモと普遍数量詞が共起できない原因としてアスペクト限定性の違いも無視できない。三原（1998, 2004）は、先行名詞と数量詞の指示するものを結びつける数量詞連結構文がアスペクト限定の問題であることを指摘しており、文脈上「時間限定性条件」が満たされれば結果項として動詞句に数量詞を介在させることができるという。普遍数量詞はその意味から「時間限定性条件」が満たされる要素であり、普遍数量詞の分布が自由であるという事実も説明されうる。

(77) a. 5年間本を書いたが、まだ書き終わっていない。
b. 5年間<u>も</u>本を書いた。
c. * 5年で 本を書いたが、まだ書き終わっていない。
d. * 5年で <u>も</u>本を書いた。
e. 花子は本を｛5年間/5年で｝書いた。

(78) a. 論文を20本読んだが、まだ（読み）終わっていない。
b. 論文を20本<u>も</u>読んだ。
c. * 論文を 全て 読んだが、まだ（読み）終わっていない。
d. * 論文を 全て <u>も</u>読んだ。

上記のデータから、日本語で非限界動詞に終了期限をもたらす「で」をもつ句にモを直接付加させられないという事実と、アスペクト限定を義務的に生じさせるUQにモが付加されないという事実が類似した現象であることが予想される。このことから今後は「時間限定性条件」と統語構造との関連性について、考察を進めていきたい。また、極限のモと普遍数量詞はともに量化を示す付加詞であるために、同じような位置に生起したということが言えるが、普遍数量詞のみが生起できた複合DPの付加位置にモを生起させた場合、累加のモの解釈しか考えら

れない。もし形式Bをとる普遍数量詞が累加のモと統語的関連性をもつのであれば、極限のモと累加のモとの違いも統語位置に起因させることができるのではないだろうか。この点についても今後より詳細に検討していきたい。

＜参考文献＞

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房

井上和子（1978）『日本語の文法規則』大修館書店

岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相－数量詞は数を表すコトバか－』くろしお出版

宇都宮裕章（1995）「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』第87号 pp.1-11

大木充（1987）「日本語の遊離数量詞の談話機能について」『視聴覚外国語教育研究』第10号，大阪外国語大学 pp.37-67

奥津敬一郎（1986）「日中対照数量表現」『日本語学』第5巻第8号 pp.70-78

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

加藤美紀（2003）「もののかずをあらわす数詞の用法について」『日本語科学』13 pp.33-57

北原博雄（1999）「日本語における動詞句の限界性と決定要因－対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論－」黒田成幸・中村捷編『ことばの核と周縁－日本語と英語の間－』くろしお出版 pp.163-200

小林亜希子（2009）「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』第136号 pp.121-151

髙見健一（1998）「日本語の数量詞遊離について－機能的分析」『月刊言語』27巻1–3号（上）pp.86-95,（中）pp.86-95,（下）pp.98-107

田中秀毅（2015）『英語と日本語における数量表現と関係節の解釈に関する記述的・理論的研究』開拓社

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

中村ちどり（2001）『日本語の時間表現』くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法5 第9部 とりたて・第10部 主題』くろしお出版

沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

前田雅子（2013）「日本語における Derivational Feature-Based Relativized Minimality」遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』開拓社 pp.163-184

三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』27巻6-8号（上）pp.86-95,（中）pp.94-102,（下）pp.104-113

三原健一（2004）『アスペクト解釈と統語現象』松柏社

Fitzpatrick, Justin (2006) *The Syntactic and Semantic Roots of Floating Quantification*, Cambridge, MA: MIT Dissertation

Miyagawa, Shigeru (1989) *Structures and Case Marking in Japanese (Syntax and Semantics 22)*, New York: Academic Press

Ochi, Masao (2012) "Universal Numeric Quantifiers in Japanese," *Iberia* 4(2) pp.40-77

Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19 pp.425-449

注

i みんな（2人称ではない場合）」「毎日」などにも、普遍数量詞同様極限のモとの共起が許されない例が見られるが、これらを普遍数量詞と同等に扱えるかどうかに関する議論は別稿に譲る。また、「全てもの始まり」など普遍数量詞にモが付加していると考えられる例は見られたが、このような「全て」は数量詞としてではなく、「あらゆる出来事」といった意味の名詞として使用されていると考えたい。

ii 中国語母語話者（私信）によると、「都 dou」はそれが指すものの構成数量が100%であることを強調するために用いられるという。日本語の極限のモとは、厳密には意味が異なるが、混同して使用されている可能性がある。

iii UQの中に「誰も」を含むこともあるが、本稿では、「3人」などの数量的数量詞に後接できないことから、「誰も」は名詞「誰」に「も」が付加し、偶発的に全称詞として用いられているものとさせていただきたい。

iv 以下のような「たくさん」や概数詞、疑問数なども存在数量詞の一種であり、本来であればNQと同等に扱われるべきであるが、紙面の都合上、これらの分析に関しては、今後の課題とさせていただきたい。

●数量詞×全数

1) *学生　たくさんが　来た。

2) *学生　たくさんが　みんな　来た。

3) *学生　みんなが　たくさん　来た。

●概数詞×全数

4) 学生　何人かが　全員　来た。

5) *学生　全員が　何人か　来た。

●疑問数×全数

6) 学生　何人が　全員　来たの？

7) *学生　全員が　何人　来たの？

v　日本語における名詞句が決定詞などを見えない形で持ったDPであるのか、NPであるのかは諸説ある。本稿で扱う名詞句はDPであってもNPであっても議論の方向性に大きな違いは生じないと感じられるため、DPとNPを同様に扱うが、大きく名詞句NPに数量詞的な要素が組み合わさりNPよりも複合的な構造をなしていると考えられるものはDPとして扱うこととする。

vi　[NP+UQ+NQ]の語順が容認されるというコメントも得られたが、UQではない「学生総勢30名」などと混同して使用されるようになったという可能性も考えられる。

〈キーワード〉　極限のモ、普遍数量詞、存在数量詞、階層構造

The Syntactic Structure of *Kyokugen-no Mo* and the Universal Quantifier

EBARA Mika

In the Japanese language, the particle *mo*, which can associate with quantifiers (*kyokugen-no mo*), cannot co-occur with a Universal Quantifier. The particle *mo* can in such cases precede the genitive particle *no*, which means it is different from the standard particle *mo*. On the other hand, since the Japanese Universal Quantifier is generated outside the complex DP and cannot be divided into two it is thus different from the Numeral Quantifier. According to the data, in cases where *mo* and UQ are combined with NQ and NP, there exist two possibilities where *mo* and UQ can be generated; *mo* and the UQ in *from A* both adjoin NQ and they accompany NQ; the UQ in *form B* is generated out of the Complex DP, which leads to the adverbial UQ. As a result, *kyokugen-no mo* and UQ in *form A* occupy the same slot in the DP structure. This article assesses the possibility that *mo* and UQ possess the same features as adjuncts.